様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ４ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０９００

研究課題名（和文）原産地資料からみた南島貝交易の実証的研究

研究課題名（英文）Study of Shell-trade in Yayoi period from a viewpoint of Ryukyu Islands

研究代表者
木下　尚子（Kinoshita, Naoko）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：７０１６９９１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：弥生時代の貝交易を琉球列島の貝殻集積の分析を通して再検討した。その結果交易されたゴホウラのほとんどは沖縄諸島で作られた貝輪粗加工品であることが明らかになった。貝殻集積に沖縄諸島で試作された弥生人向けの腕輪試作品が混在していることから、弥生人の腹面貝輪のデザインが沖縄諸島で生まれていたこと、これが貝殻運搬を行う弥生人と沖縄貝塚人によって生み出された可能性のあることがわかった。貝交易は、背面貝輪の粗加工品が登場する「開始期」、腹面貝輪の粗加工品が主体を占め貝殻の質が低下し始める「展開期」、腹面貝輪の粗加工品が登場する「最盛・衰退期」の 3 段階に区分される。開始期は弥生時代早期に遡る可能性がある。

研究成果の概要（英文）：For these 20 years the data from Ryukyu Islands on the shell-trade increased, I reexamined it from the viewpoint of the place of shell product, through analysis of the shell accumulation left in Okinawa. Trough analysis, it became clear that half made artefact of Gohoura, strombus sp., was the main trading material from the beginning of the trade, not the shell itself as it was realized before. It assumed that the people from the north for trading and Okinawa islanders made the primary design of the Yayoi bracelets together, because the bracelets very similar to that of Yayoi culture were often found in the shell accumulation in Okinawa.
The shell-trade is divided into three phases; "the start period" in which the half-made artefact of the back holed type appears, "the developing period" when the type of the ventral holed occupies the main consumption and the quality of the shell begins decreasing, and "the meridian time to ebb tide period" when the ventral holed rough type comes up.

研究分野：考古学

キーワード：琉球列島　弥生時代　貝交易　ゴホウラ　粗加工品　南島産貝輪　北部九州　貝殻集積

１．研究開始当初の背景

弥生時代、北部九州の農耕社会は海上長距離交易によって琉球列島（南島）産の大型巻貝（ゴホウラ・イモガイ類）を消費することで、琉球列島の貝塚文化の社会と初めて経済的な関係をもち、南島産文物はその後の日本古代の文化に一定の意味をもつようになった。弥生時代の貝交易は日本古代史を理解する上でも重要な歴史事象である。20 年前、申請者の木下は、北部九州の弥生遺跡にのこる琉球列島の貝製腕輪によって貝交易の枠組みを提示したが、その後奄美・沖縄地域の資料が増え、新たな資料と視点により交易の再検討が可能になった。

２．研究の目的

弥生時代の貝交易を、消費地（北部九州）側だけに重心をおくのではなく、貝殻原産地（奄美・沖縄地域）からも照射することで、貝交易の実態を双方向的に、より詳細に復元することを目指す。

３．研究の方法

（１）　**貝殻集積の分析**：沖縄諸島の遺跡に残されている貝殻集積（ゴホウラ・イモガイだけの貝殻溜り）を主要な分析対象とし、これを通して貝殻提供者の交易にかかわる具体的状況を明らかにする。

（２）　**原産地におけるゴホウラの評価**：ゴホウラ貝殻の評価において、加工状況に加えて貝殻の生物的状況、すなわち生貝が採集されたものか、死貝（すでに死亡した貝の貝殻）が持ち込まれたものであるかを判断基準に加える。これによって貝殻原産地における貝殻調達の実態を追究する。

（３）　**貝交易像の復元**：奄美・沖縄地域におけるゴホウラ腕輪、貝輪粗加工品を悉皆的に調べ、貝交易における北部九州と琉球列島の関係をより詳細に復元する。

４．研究成果

（１）貝殻集積の実態

本研究期間内に、未発表資料を含めて 33 遺跡 138 基 1505 個の貝殻集積を調べた。これらは全てゴホウラとイモガイ（あるいはゴホウラのみ、イモガイのみ）で構成されている。この中のゴホウラを分析した結果、集積された貝殻は、以下の４種類で構成されていることがわかった（イモガイには粗加工品がないため分析対象にしていない）。

① 粗加工品作成用の貝殻（「素材」）
② 腕輪用の粗加工品（「粗加工品」）
③ 未成品
④ 製品（「貝製腕輪」）

従来、貝殻集積は①と②によると認識されていた。今回③と④の存在が明らかになったことで、貝殻の原産地においても完成品の腕輪がかなりの割合で製作されていることがわかった。観察の結果、これらの形状が弥生文化の腹面貝輪の型式に対応していることが明らかになった。この事実は北部九州のゴホウラ腕輪の型式が原産地で生まれていたことを示唆している。ただ同じ時期において沖縄人は伝統的な背面貝輪を使用しているため、これらは輸出用の貝輪を意識して作られたものであったとみてよい。こうした貝輪が出土するのは、遺跡に弥生土器や弥生系土器、ガラス玉等の弥生文化の文物を伴う遺跡に限られているため、これらの製品は、北部九州から南下した弥生人（運搬者）が沖縄滞在中に沖縄貝塚人とともに製作あるいは試作した製品で、こうした製品をもとに北部九州のゴホウラ腕輪が登場したと考えることができる。つまり、弥生文化の南島産貝輪の型式は、消費地で独立的に生まれたデザインではなく、運搬者が関与して原産地で誕生していた可能性がある。

このように考えると、③と④は原産地における弥生人向けの貝輪商品開発によって生まれた試作品とその廃材とみてよい。

①と②が交易のために集積された貝殻であり、③と④は商品開発のための貝殻あるとみれば、貝殻集積は輸出用の貝殻と原産地での作業のための貝殻を集めた貝殻倉庫であったと理解することができる。現在遺跡に残るのは、交易後、倉庫としての使用が終わった最後の姿であろう。

（２）ゴホウラ調達の実態

貝殻集積にみられるゴホウラのほとんどすべては死貝であった。ゴホウラはサンゴ礁の水深 5m 以深の砂地に生息するので、これを生貝の状態で捕獲するのは極めて困難で

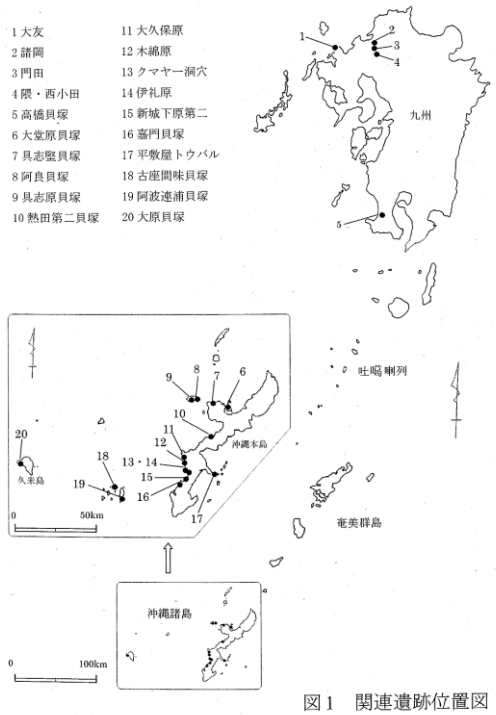

図１　関連遺跡位置図

ある。海底で死んだゴホウラにヤドカリがはいってサンゴ礁の上に出たところを貝塚人に捕獲されていたと推測される。貝交易が始まった時点からかなり粗質のゴホウラが混在するので、貝塚人は交易のために手当たり次第ゴホウラを集めていたとみられる。ただ現在遺跡に残る貝殻集積は、交易後にのこされた貝殻とみられるため、良質なものの多くは交易され、北部九州の弥生人によって腕輪になっていたと考えられる。

（３）貝交易像の復元

本研究期間内に調査した資料は以下の通りである（図１は関連する遺跡を示したもの）。

- 実測資料：122 点（沖縄県、鹿児島県、福岡県、佐賀県）
- 計測データ：366 点（沖縄県、鹿児島県）

資料の観察および実測によって、以下のことがわかった。

① 弥生社会で消費されたゴホウラ腕輪初期の厚手の貝輪、後続する諸岡型貝輪、後続の立岩型貝輪のいずれの貝輪も、その原型が沖縄本島の遺跡において存在する。

② 沖縄諸島において北部九州のゴホウラ腕輪の型式の基礎が生まれる一方で、沖縄諸島にもこれらが根付いてゆくが、その形状は左右対称を意識したもので、弥生文化のゴホウラ腕輪とは区別される形状である。

③ ゴホウラ腕輪粗加工品は、弥生文化で消費される腕輪型式に対応して複数の形が作られた。これらは大きく以下のものに分けられる。
・背面貝輪用
・腹面貝輪用
これらについて図２と図３に模式図を掲げる。

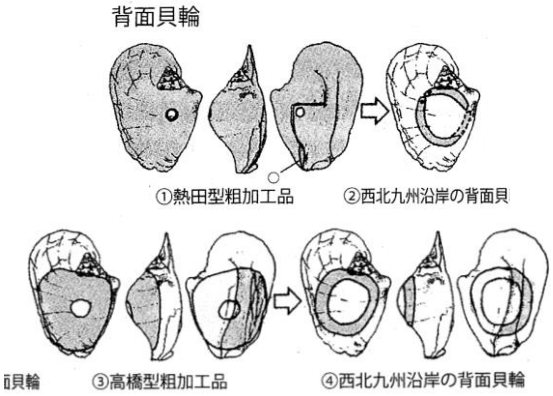

図２　ゴホウラ背面貝輪の貝輪粗加工品と製品の関係

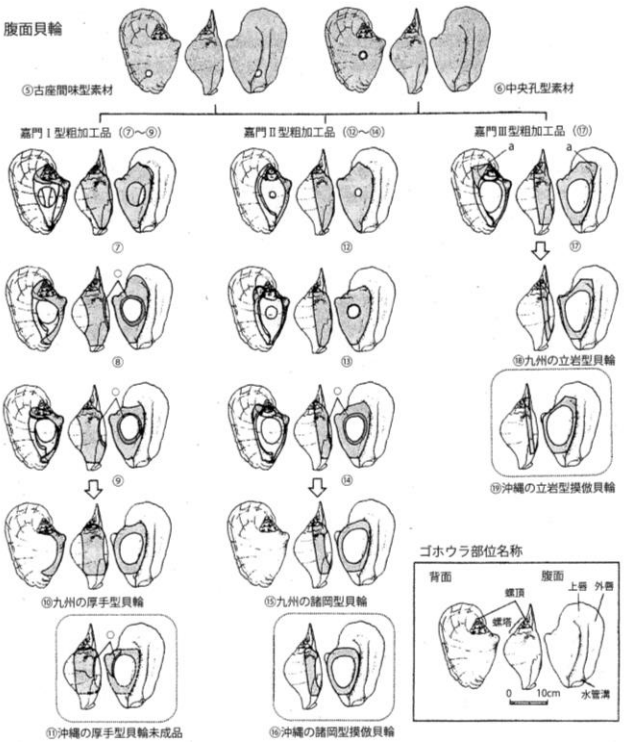

図３　ゴホウラ腹面貝輪の貝輪粗加工品と製品の関係

④ 貝交易をゴホウラ粗加工品によって分けると、背面貝輪の粗加工品が登場する「開始期」（弥生前期に対応）、腹面貝輪の粗加工品（厚手型用、諸岡型用）が主体を占め貝殻の質が低下し始める「展開期」（弥生中期前半に対応）、腹面貝輪の粗加工品（立岩型用）が登場する「最盛・衰退期」（弥生中期後半に対応）の 3 段階に区分される。「開始期」は粗加工品登場以前（弥生早期に対応）に遡る可能性がある。

〈引用文献〉

木下尚子　1988「南島産貝輪はじまりへの予察」『日本民族・文化の形成 1』永井昌文教授退官記念論文集、pp. 519 ～ 545

木下尚子　1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古』横山浩一先生退官記念論文集

岸本義彦・島　弘　1985「沖縄における貝の集積遺構－ゴホウラ・イモガイを中心に－」『紀要』第 2 号、沖縄県教育委員会文化課、pp. 49 ～ 68

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 木下尚子「貝輪粗加工品の流通－弥生時代貝交易再論－」『南島考古』第 36 号、

pp.143～160、沖縄考古学会、2017 年

② 木下尚子「奄美・沖縄諸島は奇跡の島々であったのかー『環太平洋の環境文化史』琉球環境文明史班の研究成果によせてー」『古代文化』第 67 巻第 2 号、pp.94～97、2015 年

③ 木下尚子「繁根木型貝釧考」『考古学雑誌』査読有、第 98 巻第 4 号、1-31 頁、2014 年、査読有

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者

木下尚子　(KMINOSHITA, Naoko

熊本大学・人文社会科学研究部・教授

研究者番号：70169910